



『トクシマ・アンツアイガー』

第2巻

第5号

徳島 1915年10月24日

この戦争でドイツとトルコの利害の 共通性はどこにあるのか（1）

我々の読者の中にはまだ次のことについて知らない人も多いのではないだろうか。つまり、どんな理由からトルコは我々の側に立ってこの戦争に踏み込んだのか。この戦争で我々は、長いこと全世界で組織的にイギリスとフランスの新聞によって泉に毒を撒かれ、我々の友人であることのもっともな根拠を持つ諸国民が我々に対立させられたことを知ったのだ。もちろん我々の敵はトルコでも、許される手段や許されざる手段、まっとうな手段やまっとうでない手段等、あらゆる手段を用いて、この帝国をも我々の敵にしようと試みた。しかしトルコでは彼等の陰謀もなんの成果も生まなかった。我々は常にオスマン帝国との良好な関係を深めるためにあらゆることをした。また我々はこの場で我々の最も優れた外交官の一人で、高

き門地にも関わらず永らくドイツの代表者である、公使フォン・ビバーシュタイン元帥の偉大な功績を思うにやぶさかではない。

しかしそもそも言をまつまではないのだが、トルコは我々の使った美しき目の故に、或いは我が公使たちの好意ないしはドイツ帝国によって示された友情に感謝するために、我々と共通の事柄をなしたのではない。トルコの権威筋はきちんと知っていて、この点において多数の同盟国の外交官や新聞の妨害によっても、トルコ帝国の利害が我々ドイツの利害と共通であることを疑うことはなかった。というのもこの戦争は結局やはり当初からコンスタンチノーブルとトルコをめぐる戦争だった。このことはもしかすると幾分ばかげて聞こえるかもしれない。がしかし戦争をはじめさせる敵の間での電報のやり取りではトルコについては一言も言及されず、トルコは事態の外にあり、表面的には傍観者であるように見えた。

しかしすでに直近のバルカン戦争において問題となったのは、トルコ側の勝利の後に、コンスタンチノーブルは誰に帰属すべきか、ということだった。これがロシアを後ろ盾にしていた一方のセルビア、ギリシャと他方のブルガリアとの間の敵対関係を招いたのである。ブルガリアがコンスタンチノーブルに触手を伸ばさず、コンスタンチノーブルはロシアのものになると画策していたならば、おそらくすでに直近のバルカン戦争でトルコの運命については決定されていて、多分我々はその時には今日の民族紛争を既に見ていたであろう。もしオスマントルコに終焉を与えようとしたならば、我々が何もせずに手をこまねいていたりしなかったことは自明だ。何故自明なのかだって？我々の物質的（経済的な）根拠を挙げるだけにしよう。というもこれは政治においても常に最も明瞭で、最も分りやすい言葉で語っているからだ。

世界市場で工業製品を売ることによって頼っているドイツは、更にこれ以上の国々がある一つの植民帝国に併合されることを、落ち着いて眺めていることは出来ない。その植民帝国は我々の通商に対して、権力者の気分次第で閉ざされる可能性がある。我々はそれ故この視点から、自立的なトルコの

維持には、中国の自主独立の維持と全く同じ利害、しかも目下のところ高度の利害があることを観察した。何故なら我々はトルコの領域に実に大規模な金額、それどころか我々の国民資産の相当数の部分を、とりわけ小アジアの鉄道に投資したからだ。たとえトルコの分割に際して、我々にその一部を植民地としてくれようとも、それで我々は報われるということにはならなかっただろう。地中海沿いに植民地を得ることは当時の我々にとって、国力分散となってなによりも守りきることが出来なかっただろう。そのことから明らかになることは、我々は無条件にいつでも自主独立のトルコに有利になるように歩を進め、トルコを軍事的にも強力にするために全てをなさねばならない、ということだ。中近東における我々の資産維持はある程度までトルコに委ねる必要があるからだ。

一体我々の敵はトルコを望んでいるのだろうか、そうであればなぜか？

我々はロシアというこの強力な大陸の中央に位置する帝国が、至るところで海をめがけて押し寄せるのを眼にしている。ロシアはその産物の輸出の出口への道を持ちたがっており、また持たざるを得ないのである。北では大西洋へ至るためにロシアはノルウェーを脅し、東ではその力を太平洋まで拡張し、南ではペルシャ湾と黒海から地中海までの連絡が当然ある。

この黒海から地中海までの出口はコンスタンチノーブルによって支配されていた。もしかつてまさにイギリス側が、この点でロシア人にあれこれ文句をつけなかったらならば、コンスタンチノーブルは多分もうとっくにロシアのものとなっていたであろう。

つづく

日本の磁器（最終回）

昔から美術と学問の中心地であるかつての天皇の都京都は、実に重要な磁器産業を有している。既にかなり昔の時代からそこには窯元があり、宮

廷のための食器等を製作していたが、もっとも宮廷の要求はひたすら簡素だった。何故なら宗教上の規定により、ミカドが飲食に用いる器は一回限りだったからである。慣習により食器はすぐさま破棄されなければならなかった。それ故に宮廷人のために比較的簡素な品物が使用され、それを絶えず補充する事は、さほど大きな経費とはならなかった。

19世紀以前に京都で製作された磁器は、肥前や尾張の磁器より驚くほど品質が悪かった。1800年来、肥前泉山の陶土を入れて、肥前及び尾張の製品の模倣を始めた。当初は青い色彩を施された磁器に限定されたが、製品はごく小さく、最も大きいもので約1½フィートで、一方肥前と尾張では高さ8フィートの花瓶まで色づけされた。比較的近年は、様々な色彩を色づけされた磁器も試みられたが、満足のゆく製品を仕上げることに成功したのはごく二、三の窯元に過ぎなかった。青い彩色磁器（染付け）とともに、いわゆる錦縁（錦欄）も挙げることができる。この場合には、輝くばかりの赤い下地に模様が金で彩色されている。郊外の穴太ではまだ陶器の製作が盛んである。強い需要のために、日本で本物の薩摩の在庫が売りつくされると、ヨーロッパ市場はここからもたらされた「薩摩」で溢れかえっている。模造の薩摩陶器は本物の薩摩とは、そのより繊細な形、ずっと薄く、かつ釉薬の中のより規則的なひび、そしてくすんだ黄色の色調で区別される。磁器工場は上述の主要生産地域限定に留まらず、我々は肥後、美濃、摂津、武蔵、そこと隣接する東京、横浜のような一連の地域に磁器の窯元をもっている。しかし、その製品は広範な名声を得るには至っていない。東京の磁器彩色工場は、それに反して大きな技術的な成果を成し遂げ、あらゆる地域から製品が東京へ絵付けのために送られている。

完

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（続き）

父親と一緒に掛けたイタリアで成果に満ちた数年を経た後、モーツァルトはザルツブルクのヒエロニムス大司教の下で、コンサートマスターとして雇われた。この大司教は飛び切りの悪意でモーツァルトを苦しめ、支払う報酬も少なかったが、それにも関わらずモーツァルトが自分の為にコンサートを開催することを拒み、居並ぶ全ての人々をうっとりさせた業績をおとしめて、コンサートマスターをひたすら罵った。いくつもの価値に富む作品はこの時期に由来する。モーツァルトはいくつかの宮廷で職を得ようと試みたが、彼の見栄えの良い姿にもかかわらず、障害があったように思われる。そこで彼は結局当分の間は王侯の庇護をうけることを断念して、1778年多くの作曲家と同様にパリへ赴き、その地で真価を認めてもらおうとした。9年後になってやっと彼は、彼の君主である皇帝ヨーゼフ二世によって室内楽士に任命され、年俸800クローネの報酬を得た。それは生活するには少な過ぎる、飢えるには多過ぎる額だった。つまり、モーツァルトが常に金銭に事欠いていたことは何等不思議ではない。ちなみに彼は、ピアノの個人授業をする必要性も感じ取っていた。『フィガロの結婚』と『ドン・ジョヴァンニ』によって既にとっくに名声が確立された後でも、モーツァルトは1790年にある友人に宛てて、ピアノを習いに来る生徒が二人しかいないので、二、三人探してくれるようにとの依頼をしている。つまり見事な演奏にも関わらずモーツァルトは、望ましいピアノ教師とわれていなかった。それというのは新しい音楽の創造に夢中になっていたモーツァルトが、しばしばピアノを教える時間をあっさり忘れてしまったからである。そうでなかったとしても、好かれるようにすることがよく分かっていなかったのである。演奏旅行もまた収入の方が経費よりも少なかった。

慢性的な金欠にもかかわらずモーツァルトは、作曲した作品の大部分を売るのではなくて献呈し、気前よく名演奏家や音楽愛好家に与えた。— ち

なみに作曲料の支払いも多くはなかった。オペラ『魔笛』に対して作曲者は 100 ドゥカーテンを得たが、他方興行主はその作品で金持ちになった。知的財産の保護など当時は存在しなかった。それで劇場側は熱心にモーツァルトのオペラの楽譜を写して上演したが、作曲家にいくばくかの金を支払って感謝することなどつゆほどにも考えなかった。彼に示されたより良い地位提供の唯一の機会を、モーツァルトは忠誠と愛国心から拒絶した。プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム二世は、ヨーゼフ二世以上にそもそもドイツ音楽の友であったが、モーツァルトに年俸 3,000 ターラーで楽長の地位を提示した。皇帝ヨーゼフの「彼が自分の元を本当に去ろうとするならば」という如才ない問い合わせは、モーツァルトにその恵まれた地位を拒絶させ、ひどい低賃金に止まらせるのに充分だった。かくしてモーツァルトは最期に至るまで貧窮に苦しんだ。彼の作品に恐らく最大の理解を示したハンガリーの貴族が（モーツァルト自身が書いているように、彼を正しく理解した観衆への感謝の気持ちから、『フィガロの結婚』の熱狂的な上演後に、ハンガリーの人々のために傑作『ドン・ジョヴァンニ』を書いて捧げた）、人々の署名によってかき集められた。年俸を提示する決心をしたのは遅きに失した。あまりに早くモーツァルトは生存をかけた休まない戦いに屈していた。彼は 1792 年 12 月 5 日借金を残して死んだ。その借金は皇帝レオポルトが支払った。

彼には経済観念がなかった。さもないと死にはしなかっただろう、とモーツァルトは非難された。しかし、モーツァルトのような作曲家に関して、儉約術の練習をするためだけに生活することを要求することは出来ない。その代わりに彼は世界を音楽上の資本で贅沢に満たし、音楽芸術の価値を創造し、それは常に良い進路を保つことになる。後にモーツァルトのための記念碑に支出された大金のごく一部でも彼に与えていたならば、彼は全生涯にわたる生活苦を乗り越えられたであろう。

モーツァルトが金を稼ぐために作曲したのではなく、創造が彼に喜びを与えたということは、ライプチヒの楽譜出版者ホーフマイスターと彼の往

復書簡も証明している。ホーフマイスターは彼に、「人気の出るもの作曲しなさい、さもないと私はもう君のものは何一つ出版出来ないし、お金を支払うことも出来ない」、と警告した時、彼は「そうなったら僕はもう何も稼げないで飢えてしまうが、そんなことは一向に構わない」、と答えた。多分、彼は本筋においてはいくらか時代の好みに合わせていた。つまり楽しく、陽気にということである。その時代は室内楽でさえ、高貴な身分の方々の食事に薬味を添える役目を担っていた。しかしながらモーツァルトは、自分にとって楽しいものを書いた。彼が年とともに益々ドイツ民族的になり、このことが音楽においても表現されたことは、我々を喜ばし、我々に感謝を抱かせる気持ちにさせる。彼は若い頃、揺るぎない形式にこだわり、すでに述べたように、ただ一人一人の者がその内面の動きを音で表すことが出来るのであって、四声で歌う人々の群はそれほどではない、との当時の支配的な考え方を信奉した。創造力が豊かになるにつれて、イタリア音楽の浅薄さが益々彼には鼻についてきて、ドイツ民族的感受性が力強く動き始めた。益々彼はドイツ人の音楽とオペラを高めることを目指す仕事をした。ある手紙の中で彼は次のように言明している：「どの国民にも自身のオペラがある。なぜ我々ドイツ人がそれを持つてはいけないのか？ドイツ語はフランス語や英語のように上手に歌うことが出来ないであろうか？ところで私は今自分のためにあるドイツ語のオペラを書いている。せめて一人でも愛国者が高い地位にいるならば、舞台は違った姿をとるのではあるまいか！—しかしその時には多分、見事に芽生える国民劇場が花開くであろうし、もし我々ドイツ人がいつか真剣にドイツ語で考え、ドイツ語で振る舞い、ドイツ語で演説し、そして他ならぬドイツ語で歌えば、それは本当にドイツにとって永遠の汚点であろうか。」

すでに 1777 年にモーツァルトは、イタリアの旋律とフランスのオペラの戯曲的感動を利用する際に、ドイツの声楽ドラマを創造する必要性に突き動かされた。パリから彼は父親に、「自分は自身と全ドイツ国民に名誉を与えるべく、毅然として辛抱する」と書き記している。我々は彼を今や、

ドイツ人マイスターとして数え入れることを誇らしく思う。

モーツァルトが一人の天才であり、華麗にして特有の音楽造形を最初に企てて、打ち立てることができたことは、彼が6週間で仕上げたオペラ『フィガロの結婚』が証明している。序曲からしてその方法は独特である。生と愛の明るく澄んだ喜びを歌うヒバリのさえずりが聴き取れる。メロディーの新鮮さと生き生きしたリズムの中を音の響きが走り、快活な輪舞を展開する。ひたすら急いで跳び跳ねる陽気さにもかかわらず、モーツァルトはそれと同時に節度をわきまえる術を心得ている。同じような喜びの気分の中をオペラ全体が、極めて新鮮にかつ美しく流れてゆく様は、一人の天才作曲家にしか思いつき得ないものだ。

『ドン・ジョヴァンニ』で我々の心を奪うものは溢れるほどのメロディーの着想で、作曲家は其中で、メロディーを音楽の魂と名付ける彼のモットーを証明している。その際、大抵のアリアは明白な民謡の特徴をもっている。私がただ思い出すのを一曲だけあげるとすると、「いつまでも私に手を差し伸べておくれ」だ。

全ての作品の一つ一つの美しい点を指摘することはあまねく行われた。しかし、たとえ巨匠の内容豊かな創作のどこを眺めても、至るところで我々は彼の天性の曇りない明朗さを見て取れるし、全てが人生において充分に行われて、充分に創造されたとの音楽的な確信が感じ取れる。

モーツァルトはひょっとしたら、彼の追想が全世界で祝われ続けるであろうことを意識していたのであろうか？

第 24 回コンサート（1915 年 10 月 24 日）

演奏曲目

- 1) オペラ『フィガロの結婚』序曲 W.A. モーツァルト
- 2) 男声合唱のための歌二曲
 - a) ターラウのエンヒェン

b) 悲しいかな、我らは別れねばならない

「ゲルマニア」合唱団

3) 結婚セレナーデ クローゼ

4) 小さな錫の兵士。フルート奇想曲 ローザイ

5) プロイセンの栄光 ピーフケ

海軍膠州砲兵隊のパレード行進曲

次の日曜日の第 25 回コンサートで夏季演奏は閉じる。冬季コンサートはホールで開催される。見込みでは冬季シンフォニーコンサートは 3 回である。その準備にオーケストラはかなり時間を取るだろうから、時に恐らく日曜コンサートの中止が考慮されねばなるまい。

第 2 回スポーツ週間

次期スポーツ週間は 11 月に举行されるであろう。しかもそれ相応の天候が事前に予想される 11 月 8 日から始まる週に。

次の競技が目論まれているが、第 1 回スポーツ週間の時と同じメンバー構成の委員会は、できる限り次のような変更提案を考慮するであろう。

ファウストバル

サッカー

リレー競争

6 種競技 砲丸投げ、走り高跳、棒高跳び、走り幅跳び

ドイツ式三段跳び、徒手体操

障害レース

石投げ

申し込みはキューパー副曹長まで。

チェス・コーナー

(駒の略語 K = キング、D = クイーン、L = ビショップ、
S = ナイト、T = ルーク、B = ポーン)

第 53 問の解答

1. Lh8 - a1 任意の手
2. D で詰み

第 54 問の解答

1. Db2 - b7 Kd6 x d5
2. Lf1 - e4 + Kd5 x e4
(d6 - c5, - e6)
3. c6 - c7 または Db7 - e7 で詰み

第 54 問 その他の解答

1. Kd6 - c5
2. Db7 - e7+ Kc5 x d5(c6)
3. Lf1 - e4 または
Sd5 - b4 で詰み

1. f7-f5
 2. Sd5 - b4 任意の手
 3. Dd7 - e7 詰み
- 他の変化も容易

正解を送ってきたのはヨーゼフ・ヴェーバー。

第 55 問

白 : Ka5, Td4, h5, Lg3, Sc3, Bf3 ,g4

黒 : Kc5, Bc6, e5

2 手詰み

第 56 問

白 : Kc7, Dg6, Te4, Sf8, Bd3

黒 : Kd5, Dc2, Td4, Lf7, Sc8, h6, Bb3, b4, b7, c5, e5, f3

3 手詰み

灰緑色の制服の海軍（3）

静かな夜が明けた 11 月 10 日、海軍師団の砲による、歩兵隊の攻撃のための準備砲撃が開始されたが、敵の砲台は確認されなかった。そこで始めて翌日に命令が下った。「兵団は明日、海とボーター・デイクの間の敵を攻撃し、その陣地を確保してロンバルトセイデの南端まで突き進む。」

絶え間ない砲撃戦の後、将軍は 11 月 1 日午後 1 時 15 分に歩兵による攻撃を命じた。怒涛の如く歩兵隊は街道の両側へ出撃して、午後 4 時頃にロンバルチューデを占領した。けれども街道の右の砂地からは、攻撃側に向って吹きつける、眼をくらませる砂嵐が前方への進撃を阻んだ。銃は砂にまみれて、数発撃った後に駄目になった。海辺の最も外側の右翼から、第 3 中隊の中隊長が側面攻撃のために銃剣を振り上げたとき、攻撃はすでに 1 時間半停滞していた。その様子を第 4 中隊の下で軍旗を持って伏せていた司令官が見ていた。彼は軍旗を払って掲げさせた。旗は前線で、味方にも遠くの敵にも見えるように翻り、そしてフラーと怒号を挙げてその部隊は死をも恐れぬ突撃に移った。部隊が渡渉した砂は、あるいは戦死し、あるいは傷ついた 9 名の将校と 175 名の兵卒の血を飲み込み、敵は逃走したが、機関銃による追撃射撃は敵をなぎ倒した。午後 4 時 30 分、旗の竿が街道の北の命令どおりの最終陣地の砂に突き刺された。

愛するアンナ！

フランスは寒い天候で、
そこで歩哨に立つ兵士の
誰もが憧れるのはおそらく
恋人が今クリスマスの木を
こしらえる小部屋

これはハインリヒ・クネチュケが作った詩

著作権を全て留保！愛するアンナ！もし君がこの詩作品を味わえば、多分君は涙を覚えるだろう。そして君に、今とても多くの詩が中隊で作られていることを知ってもらいたい。つまり愛を運ぶ自動車が到着して、その車の中には様々な小包と韻を踏んだ詩とが収められていて、その詩の中で我々みんなは返事をしているのだ。僕が君にともかくも言いたいことは、僕がこの詩をさらに別の二人のご婦人がたに宛てて書いたということだ。著作権を全て留保。というのは、そのご婦人方が僕に韻を踏んだ煙草のパイプとその帯紐を送ってきてくれたんだ。そしてその帯紐には「雷鳴のような叫びが轟く！」という言葉が実に見事に刺繍してあった。

愛するアンナ！僕がいま詩を駆使していることを知って、君はある驚きに包まれているだろうと、僕はもちろん思っている。しかし戦争はたいていある種の変化を産みだすものだ。戦争では普通の人間は自分の感覚では、こんなことは存在しないと考える。あるいは格言が言う通り、「今日は闇でも、明日は曙！」¹。というのも、僕の最後の手紙にはまだ実に悪い状態が書かれてあったけど、それに対して今の僕の戦略的な心構えは再び非の打ち所がない。つまり、我々の小隊はクリスマスイヴの間前哨を命じられ、とある美しい東屋に寝起きしている。それはあるフランス人侯爵がその夫人

1 原テキストでは“Heute tot, morgen rot”。正しくは、“Heute rot, morgen tot”(「朝には紅顔ありとも、夕べには白骨となれり」)。

のために建てたものだ。しかしその侯爵夫人は目下不在だ。そして100メートル先に小さな城があるけれど、その背後にフランス軍の前哨がいるので、そこには我々は移らなかった。すると中尉殿が言った。クネチュケ、クリスマスの木を一本切り倒さねばならない。それで僕は城に向った。というのも僕はすでに事前に、後ろの車寄せのところに見事なモミの木を目撃していたからだ。しかし僕がそのモミの木を持って戦略的退却をし始めたとき、突然物音が聞こえ、城から大声で歌を歌いながら赤ワインの瓶を持った数人の男達が来た。そしてこの男達は揺り木馬のようにふらついていた。そこで僕はすぐさま「ははーん」とつぶやいた。そして足音を立てずに木を持って帰って、中尉殿に赤ワインのことを報告した。

愛するアンナ！それを受けて中尉殿はすぐさま6名をかき集めて、僕の先導で城へ進軍した。多分君はそこで、今や決定的な戦闘による城の引渡しになると期待しているかもしれない。しかしこれがそうはならない。僕たちは車寄せを占領し、それから地下室に侵入した。僕たちは何ら迷うことはなかった。彼等の物音が僕たちに進むべき道を教えてくれ、地下室からマルセイエーズが聞こえてきたからである。しかし僕たちがまだ暗い地下室の中にいた時、一人のフランス人将校が地下室の扉を開けた。愛するアンナ！そしてこの将校もすでにかなり出来上がっていた。そこで僕たちが誰か気づかずに、フランス語でちょっとシャンペンを運んでくれないかと言った。すると中尉殿は、僕たちはまさにそのために来たのだと答えて、地下室に踏み込んだ。ねえ君、君だったら多分とんでもないことに気づいたかもしれない。というのはそこにはフランス兵たちの前哨が半分おり、つまり海岸榴弾砲のようにフランス兵ではいっぱいだった。多分信じてくれると思うんだけど、僕たちが来たのは遅くはなかったことを僕たちは創造主に感謝した。でなきゃ、フランスのハリネズミ野郎達は自分達だけで全部空けてしまっていただろう。

愛するアンナ！もしかしてムシューが口を引っ張れば、肉雑炊を作り出せただろう。僕たちときたら向う見ずな奴ら四人で、多分何人かを集めさ

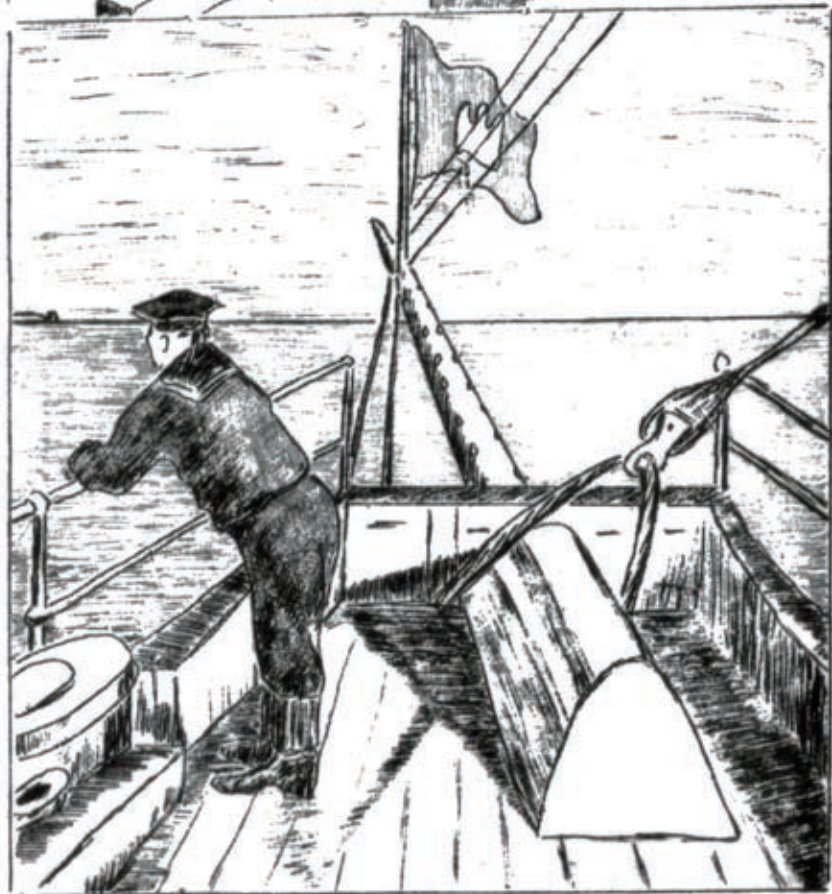
せているのだ。多分フランス人の将校も戦略的なソーセージを茹でる大鍋が必要なを見抜いた。というのもその彼が中尉殿に手を差し伸べたとき、それと一緒にひよこの兵士が僕の首にすがりつこうとしたけれど、僕はそんな同胞意識は拒絶した。愛するアンナ。というのもその男が酷いゲップしたからだ。僕たちは次の条件でクリスマス休戦を結んだんだ。つまりフランス側は僕たちのテントに瓶 50 本運ぶのを手伝うという条件で。

愛するアンナ！もう君には分かっただろう。これが素晴らしい贈り物だということ。というのも僕たちにはクリスマスツリーがあり、折しも仲間たちはツリーに灯りをともしている。そして彼らは「きよしこの夜」を歌ったが、ブラインドがガタガタと音を立てた。というのも彼らの声は牡牛の声みたいなんだ。シャンパンの瓶が一本と白馬マークのマンペ・ハルプハルプの薬草酒が一本、それに合った格言入りのパイプがある。で僕は見事なテントの中に座っている。テントの中で中尉殿はこう言った。彼はルイ・カト一家の出で、多分とても巧みな指物師だったよ、君。でもその男はただうわべだけの存在で、心の中には君がいる。今は僕から遠く離れているけれども。

愛するアンナ！このことはいつまでも変わらないことを約束して、僕は君にも似た高価なワインを飲み干したい。何故ならそのワインは年代ものなんだ。こう思って君を心から愛するハインリヒ・クネチュケは君に口づけを送る。



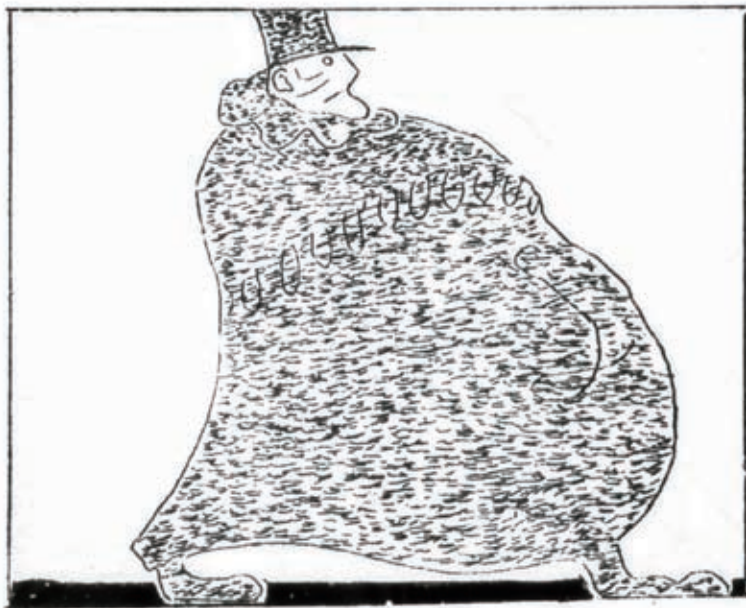
『トクシマ・アンツアイ
ガー』第2巻第5号
(1915年10月24日)
ユーモア付録



水兵の帰郷の夢 「ヘルゴラント島が見える！」



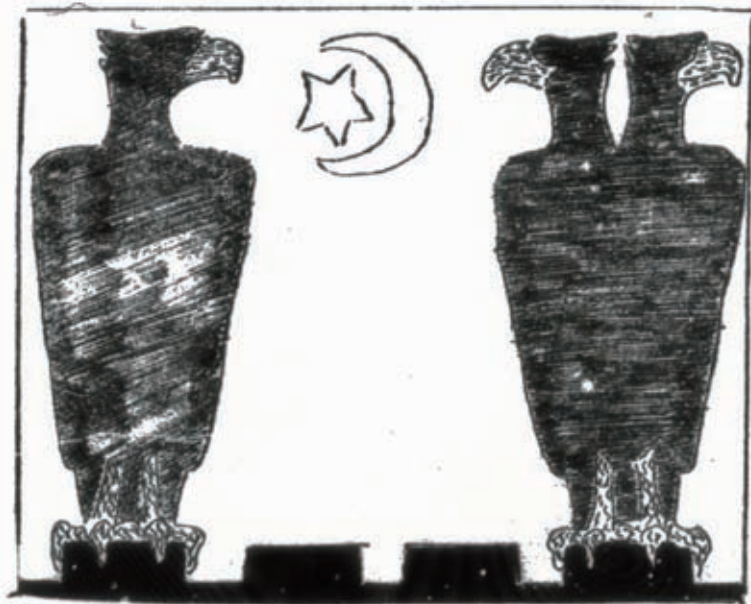
1914年から1915年の戦史。イギリスの嫉妬が原因。



イギリスの金原動力



嘘が助けにやって来た



忠誠と力が勝利に通じる



全部隊、転進！

(『リル戦時新聞』より)